

2019年5月26日(日)／説教者：国分美生

説教：「沈黙の声を聴く」

聖書：マルコによる福音書15:33～41

マグダラのマリアはじめ、ここに名前が挙がっている女性たちは福音書の最後にほんの一瞬だけ出てきます。ですが実はこの女性たちはイエスに付き従い、最後までイエスの十字架の死を見届け、その埋葬に立ち会い、さらにはイエス・キリストの復活の最初の証人となった弟子たちでした。

マグダラのマリアについて聖書にはわずかな情報しかありませんが、4福音書すべてにその名前は存在感をもって記されています。おそらく彼女はイエスの弟子たちの中でも、最も重要な役割を担い、その後の初代教会の中でもリーダー的存在の一人でした。彼女は伝統的に「売春婦」、「罪の女」と解釈されてきました。その根拠はひとつには14章のナルドの香油をイエスに塗った一人の女性の記述。ルカの並行箇所を見ると、男性たちが怒って「この女は罪の女だから、触るとけがれる！」と言っています。罪の女というのはこの時代では、いわゆる売春婦。ですが実はそこにマグダラのマリアの名前は一切かかれていません。ですから前述の伝統的解釈は非常に無理のある見方です。

マグダラのマリアが罪の女と解釈されたのには、もう一つ理由があります。マルコ・ルカ両福音書からわかるのは彼女は「七つの悪例をイエスに追い出していただいた女」…なんらかの重い精神疾患を負って、苦しい人生を送っていたと思われまふ。当時精神的な病は、罪の結果もたらされたものであるという迷信が人々の間に根強くありました。病気を患うということは、肉体的に苦しいだけでなく人々から冷たい軽蔑のまなざしで見られ、「罪びと」として扱われることでした。マグダラのマリアがイエスに癒していただいたのち、献身的に付き従い最後まで共にいた動機、それは苦しみから彼女を解放してくれたのがイエスだからでしょう。「残りの人生すべてをかけて付き従っていくのはこの方しかいない」と思ったかもしれませんし、もしかしたら帰る場所はこのイエス・キリストしか、彼女には残されていなかったのかも知れません。

聖書からわかるようにイエスは病人や女性を差別しませんでした。すべての人に対して同様に愛と憐みのまなざしを向けました。共同体からつまはじきにされていた人々と食卓を共にし、権威主義と弱い者を搾取する信仰のありかたに怒りを表した方でした。後世の教会によって埋もれてしまった沈黙の声があることを念頭に置いて聖書を読んでいきたいものです。(国分美生)